

---

# コード = ローズ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コールドローズ

### 【Nコード】

N6035Q

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

仕事人間の若葉侑布は孤独な状況になっていた。上司の課長が彼にある男性を紹介した。そこからはじまるものは。大人の恋愛を書かせてもらいました。

## 第一章

コールドローズ

若葉侑布はアパレル会社に勤めている。今では主任になっている。黒い長い髪にやや垂れている瞳は青がかっている。

優しい顔立ちをしており口元には色気が漂っている。背は高く服は露出は高くななくスカートの丈も膝までのものであるのだ。胸が大きい為色気はかなりのものだ。

その彼女だが。周りには浮いた話は全くなかった。それを誰もが不思議に思っていた。

「何でだろうな」

「ああ」

「あれがわからないよな」

「全くだよな」

こう言っただけで首を傾げるのだった。彼女はもうすぐ三十代になるうとしているがそれでもだった。浮いた話一つなく恋人もいないのだ。本人は至って穏やかな性格だ。しかも仕事もできる。それでもなのだった。

そうした相手がない。全くなのだった。

そして本人もだ。こう言うのだった。

「実はね」

「実は？」

「どうしたんですか？」

「これといった相手がないのよ」

居酒屋で皆で飲んでいる時にだ。こう言ったのである。

「それでなのよ」

「それでなんですか」

「お相手ですか」

「いないんですか」

「いたら違っけれど」

日本酒のそのグラスを飲みながら話す。

「けれどね。それでもね」

「いないんですか」

「これといった相手が」

「私はね。これと違って相手に感じないの」

そうだとするのである。

「どうもね。誰かいたら」

溜息と共に話す。

「いいのだけれどね」

「そのうち出て来ますよ」

「そうですね」

周りにはありきたりの言葉で慰めるのだった。

「ですから。あまり悩まずに」

「出会って本当に運命ですからね」

「それを待つて」

「そうなのね」

こう話してだった。そしてだった。

その侑布に酒を勧める。励ましの酒をだ。

「どうぞどうぞ」

「飲んで下さいよ」

「もう一杯」

「有り難う。本当にそうなればいいけれどね」

寂しい笑みで応える侑布だった。とにかく今は相手がいなかった。

誰にも何も感じることはない自分にも歯がゆいがた。それが辛く感じだしていた。

そんな日を過ごしていた。するとだった。

ある日だ。上司の課長にだ。こう言われたのである。

「若葉君、いいかな」

「はい？」

仕事をしている時にである。こつ声をかけられた。

「今度の日曜空いてるかな」

「はい、その日はオフですけれど」

「うん、じゃあ丁度いいね」

「いいとは？」

「その日曜だけねど」

課長は彼女の問いに構わず言葉を続けてきた。

「会って欲しい人がいるんだ」

「会って欲しい人とは？」

「うん、まあここまで言えばわかるかな」

課長は笑いながら言うのだった。

「それでね」

「そういうことですか」

実際にこれで察しがついた彼女だった。それでこつ述べた。

「成程」

「いいかな、それで」

課長はあらためて言うてきた。

「今度の日曜ね」

「わかりました」

侑布もその言葉に頷いた。それでだった。

話は決まった。こつしてだった。

その日曜日侑布はある店に来た。イタリア料理のレストランだ。洒落た内装であり白い壁と天井、そして木造の床である。テーブルと椅子も現代風のもので粋なものがそこにある。その店に来たのである。

白とブラウンの店の中にグレーの大人しいスーツで来た。するとだった。

ダークブルーのスーツの課長がだ。笑顔で来たのだった。

## 第二章

そしてそのうえでだ。こう彼女に言ってきた。

「来てくれて有り難う」

「はい」

「それじゃあパスタを食べながら話をしようか」

「パスタなんですね」

「フランス料理よりもこっちの方がいいからね」

課長は笑顔をそのままにしていた。

「だからね」

「フランス料理もですか」

「フランス料理はどうも気取っててね」

今度は苦笑いと共に言った。

「いけないからね」

「気取ってるからですか」

「それにひきかえイタリア料理は」

「美味しくてそのうえ気軽に食べられる」

「その通りだよ。イタリアは最高だよ」

こうまで言う課長だった。

「皆イタリア人になれば世の中はよくなるんだよ」

「イタリアになればですか」

「そうだよ。明るくて屈託がなくて」

イタリアを褒めちぎる課長だった。

「しかもね」

「しかもですか」

「女の子は美人ばかりだし」

「それはイタリアになっても変わらないのでは？」

「いやいや、変わるんだよ」

「どうしてなんですか？それは」

「イタリアになれば変わるんだよ」

かなり無茶苦茶な言葉である。だが課長は本気だった。

「イタリアは最高だからね」

「はあ」

「日本と同じ位素晴らしい国だよ」

とりあえず祖国への愛情もあるようである。だがそれでも異様なまでのイタリアへの愛を見せる課長だった。その課長が彼女を店の奥に案内した。

そこにはだ。二人の男がいた。一人は課長と同年代の中年の男だ。力士の如き巨漢でそのまま鬣を付ければ実によく似合いそうだ。

そしてもう一人はだ。三十代になったばかりと思われる男だった。鋭い光を出す黒い目は二重になっていて細めである。その上の眉は一直線で黒い。顔はやや短く鋭利な感じを受ける。顎は短い。黒い髪を上げ伸ばしているが左右は短く刈っている。それで大きな耳が目立つ。

その彼がだ。黒系統の色のスーツを着てそこにいたのだ。

そして侑布と課長の姿を見るとだ。すぐに声をかけてきた。

「いや、どうも」

「はじめまして」

二人共立ち上がって挨拶をしてきた。

「稲葉課長、どうもです」

「そちらの方がですね」

「はい、そうです」

課長はこの二人にもにこやかに返した。

「こちらがです。その先日話をしていた」

「若葉さんですね」

「そうですね」

「はい、そうです」

その侑布に顔を向けての言葉だ。

「その通りです」

「成程、そうなのですか」

「あらためてはじめまして」

若い方の男が言ってきた。見れば背は高く引き締まった身体つきをしている。その彼が侑布に対してこう名乗ってきたのである。

「浜田雄二です」

「浜田さんですか」

「はい」

こう名乗ったのである。

「宜しく御願いたします」

「いや、彼はですね」

巨漢の人物が話してきた。

「我が社のホープです」

「はい、そうですね」

課長が彼の言葉に応えた。

「同期の中でナンバーワンだとか」

「おそらくこのままいけばです」

巨漢の彼も笑顔で話す。

### 第三章

「我が社をしょって立つ人間になってくれます」

「あの、部長」

その雄二はだ。彼の言葉に気恥ずかしい顔になってだ。そうしてそのうえで言ったのだった。

「そんなことは」

「いやいや、本当じゃないか」

「違いますよ」

まだ気恥ずかしそうな顔であった。

「そんなのはとても」

「謙遜しなくてもいいよ。とにかく」

課長に顔を向けての言葉になった。

「彼は凄いですよ」

「はい」

「ただ。今も一人身なので」

部長はここでしんみりとした言葉を出してみせた。

「それが心配です」

「それで今回なのです」

「はい、そういうことです」

それでだというのだった。

「それでそちらが」

「はい、我が社きつての才媛です」

侑布を見ての言葉だった。

「彼女こそがです」

「御名前は」

「はじめまして」

侑布はここであらためて頭を下げ礼をした。それから述べた。  
「若葉侑布です」

「若葉さんですか」

「はい」

「こつ名乗ったのだった。」

「そうです」

「わかりました。それではですね」

「それでは？」

「今から話をしますか」

こつしてだった。四人でパスタとワインを楽しみながら話をするのだった。話自体はとりとめのない世間話ばかりだった。歌手や俳優のことである。

その話の途中でだ。ふと店の中にかけられている音楽が変わった。ここであった。

「ねえ浜田君」

「はい」

「この曲は何かな」

その音楽についての言葉だった。

「これは」

「プッチーニですね」

雄二はまずはこつ述べたのだった。

「これは」

「プッチーニかい」

「はい、泣くなりユー」

歌になっていた。その歌のタイトルを話すのだった。

「プッチーニの最後のオペラトゥーランドット第一幕の曲ですね」

「そうなんだ」

「はい、歌っている歌手は」

そこまで話す彼だった。

「プラシド＝ドミンゴですね」

「うっん、相変わらず見事だね」

「いえ」

ここでまた謙遜を見せる雄二だった。

「それは別に」

「いや、凄いよ」

部長は感心した顔でその彼に話す。

「その教養は」

「確かに。オペラに造詣があるのですか」

「はい、彼はですね」

部長は今度は課長の問いに答える。話をするその間にもである。パスタを食べるのを止めない。今食べているのはペンネアラビアータである。四人共同じだ。

「他にも文学や歌舞伎にも造詣がありまして」

「それは凄い」

「我が社の若手きつての教養人でもあるのです」

こう話すのだった。

「そうした彼ですから」

「ふむ、さらに凄いですね」

イタリア好きの課長にとっては特にであった。このことは感心すべきことだった。そして実際に彼は今非常に感心していたのだった。それでだ。こう言ったのだった。

「我が社に欲しい位です」

「いやいや、それはいけません」

「それはですか」

「我が社のホープですぞ」

部長は冗談でこう返した。無論課長も同じである。

## 第四章

「それをお渡しする訳には」

「それはいけませんか」

「申し訳ありませんが」

そうだとしたのであった。

「御容赦下さい」

「そうですか、それでは」

「はい、しかし」

ここで話が変わった。

「他のことならいいですから」

「左様ですか、それでは」

こんな話をしながらパスタとワインを楽しんでからであった。

その部長がだ。こう言ってきたのだった。

「それではです」

「そうですね。それでは」

課長もそれに合わせて言う。

「我々はこれで」

「そうするとしましょう」

店を出る時に二人で言っていた。

「では。後は」

「君達で楽しんでくれ」

こう言つて侑布と雄二だけを残したのであった。そのまま何処かに消えていく。観れば行く先は球場の方であった。侑ふはその行く先を見て言った。

「そういえば今日は」

「今日は？」

「広島対阪神の試合だったけれど」

そのカードだというのだ。

「課長広島出身で広島ファンなんですよね」  
「うちの部長もですよ」  
雄二もここで話す。  
「広島生まれで」  
「そうなんですか」  
「はい、それで僕は阪神ファンなんで」  
雄二は笑顔で彼女にこのことを話す。  
「そこでは色々とあります」  
「私も。実は阪神ファンで」  
「若葉さんですか」  
「はい、実は」  
こう彼に話すのだった。  
「昔から」  
「成程、同じですね」  
「藤川投手が好きで」  
「選手の好みについても言及した。」  
「それで」  
「僕は金本ですね」  
「兄貴ですね」  
「元々は広島選手ですけどね」  
「何気にここでまた広島の話も出る。」  
「それでも。大好きなんですよ」  
「金本選手ね。確かにいいですよね」  
「はい、とても」  
雄二の顔が笑顔になる。  
「それじゃあなんですけれど」  
「それじゃあ？」  
「行きます？今度」  
雄二の方からだった。  
「試合に」

「そうですね」

一呼吸置いてからだった。侑布は静かに答えたのだった。

「私でよければ」

「一緒に来てくれますか」

「はい。阪神の試合なら」

それならばというのだ。彼女は生粋の阪神ファンである。それならばだ。球場に誘われてそれで行かないというカードはなかったのである。

「行かせてもらいます」

「それじゃあ」

「ただ」

「ただ？」

「その試合に勝てばいいですね」

そのことは微笑んでの言葉だった。

「阪神が」

「確かなことは言えませんからね」

「それが阪神ですから」

雄二は今は困った笑顔になっていた。

## 第五章

「絶対という言葉はありませんから」

「阪神に絶対はありませんね」

「最終戦で負けたり十三ゲーム差を返されたり」

「どれも実際にあつたことだ。」

「日本シリーズで四連敗したことも」

「だからです」

雄二はまた言った。

「阪神に絶対という言葉はありません」

「そうですね。だからこそ面白いですけど」

「はい、じゃあ行きましょう」

「ええ、是非」

こうして二人は阪神の応援に行くことになった。球場で二人で応援する。するどであつた。二人共初回からいきなり落胆することになった。

「これは」

「よりによつて山本好調ですね」

中日のベテラン左腕がだ。見事な投球を見せていたのだ。

三者連続三振に終わった。最初からこれだった。

「立ち上がりいいですね」

「ええ、確かに」

二人の顔がここで曇る。

「これは中々打てないのかも」

「まずいですね」

「まだ初回ですけど」

「それでもこれは」

二人はそのピッチャーの好調に不吉なものを感じていた。そしてその予想は当たりだ。阪神側のイニングは零行進が続いていた。

その代わり中日側は的確に点を入れていく。憎たらしいまでに的確にだ。そして二人は試合が終盤になって気付いたのだった。

「得点はおるかヒットさえも」

「出ていませんね」

「ええ、一本も」

「まさか」

そのまさかだった。阪神側のスタンドが騒ぎだした。

「おい、ノーヒットノーランかい！」

「何で打てんのじゃ！」

「ほんのヒット一本でも打て！」

「猛虎の意地見せんかい！」

全国から集まるファン達が激昂する。しかしであった。

ヒットすら出ない状況が続いてだった。それが終わった。

見事であった。まさかのノーヒットノーラン達成である。これに

怒らない阪神ファンはいなかった。

「巨人に負けるより悔しいわ！」

「ここでその負けはないやろが！」

「中日に優勝されて楽しいか！」

「おどれ等アホか！」

怒り狂った罵倒の嵐である。そしてだ。

二人もだった。明らかに怒っていた。

「何といいますかねえ」

「はい、これは」

「終わりましたね」

「そうですね」

まさに敗戦であった。

「今年は中日ですか」

「やっぱり日本シリーズでの負けは残りますね」

「ええ、確かに」

「あの四連敗は」

日本シリーズで四連敗したチームは次の年は優勝していない。ただ昭和三十三年の巨人は西鉄の稲尾の四連投に敗れたがそれでも翌年も出た。だが今度は何回の杉浦の四連投に敗れている。

「まあ阪神らしいですね」

「いえ、諦めたら駄目です」

こう言ったのは侑布である。

「それでもクライマックスがありますから」

「だからですか」

「最後の最後まで諦めないことです」

侑布はその優しい顔を強くさせてもいた。

「それでも」

「それでもですか」

「はい、それでもです」

それを強く言うのであった。

「ですから」

「そうですね。やっぱりそうしないといけないですよ」

「はい、それじゃあ」

「今度は何処に」

「何か食べますか？」

雄二からの誘いだった。

「それで」

「そうですね。それでしたら」

「はい」

「前に御会いした時はイタリア料理でしたよね」

「ええ、そうでしたね」

「今度はどうですか」

侑布からの言葉だった。

## 第六章

「和食にしますか？」

「和食ですか」

「はい、和食に」

それはどうかというのである。

「それはどうですか」

「和食ですか」

「お豆腐なんかは」

言うのはそれだった。

「どうでしょうか」

「お豆腐ですか」

「はい、お豆腐です」

穏やかな笑みに戻っての言葉だった。

「それで」

「そうですね。いいですね」

雄二も彼女の提案に笑顔になった。

「それなら湯豆腐なんかどうですか？」

「いいお店を知ってるんですか？」

「はい、丁度近くに」

それがあるというのだ。

「ですから。どうですか？」

「この辺りにあつたんですか」

「はい」

そうだとだ。笑顔で話すのだった。

「そうです。お豆腐は好きですか？」

「大好きです」

侑布はにこりと笑って雄二の今の言葉に答えた。

「お豆腐なら何でも」

「そうですか。じゃあそれでいいですよね」  
「はい、それでは」

こう話をしてであった。二人でその豆腐屋に向かう。そうしてであつた。

二人の仲は親密になつた。そしてだ。課長もそんな侑布を見て言うのだった。

「上手くいつてるみたいだね」

「いつているとしたらどうなるのでしょうか」

「決まつてるじゃないか」

課長はにこりと笑つて話した。

「幸せになるんだよ」

「幸せにですか」

「そうだよ、幸せにね」

なるというのである。

「なるんだよ」

「実はですね」

「うん、実は？」

「この前プロポーズされました」

そつなつたというのだ。

「一緒に阪神の応援をしたその時に」

「その時にかい」

「はい、その時にです」

「阪神でも勝つたのかい？その時は」

「わかりますか？」

「わかるよ」

課長は笑つて侑布に話した。

「プロポーズをするには度胸がいるからね」

「そうですね、それはわかります」

「だからね。阪神が勝つて勢いがある時に」

「それでなんです」

「そして」

課長は「ここでさらに言った。

「君はそれを受けたね」

「それもおわかりになられるのですか？」

「ははは、それは簡単だよ」

課長は大いに笑って言うてきた。

「もう一目でわかるよ」

「一目で、ですか」

「そうだよ。わかるよ」

「こう言うのである。」

「それはね」

「そうなのですか」

「君が笑顔だからね」

言うのはここだった。

## 第七章

「それでだよ」

「笑顔ですか」

「なってるよ、これまで見たことのないみたいだね」

「そんな笑顔ですか」

「うん、どうやら君も」

「私も？」

「溶けたみたいだね」

そして言うのだった。

「どうやらね」

「溶けた、ですか」

「そう、氷が溶けたみたいに」

その様にだというのだ。

「なったね。いいことだよ」

「溶けた？」

「ああ、意味がわからないかい？」

「すいません」

戸惑った笑みになってそのうえでの返答だった。

「どういう意味なのか」

「だからだね」

「はい」

「あれだよ。これまで恋愛とかはしてこなかったんだね」

「学生時代からですね」

自分のことを振り返ってみる。考えてみればその時からだった。

侑布は高校の時に同級生と交際していた。だが大学進学の際にそ

れぞれ別の地方の大学に進学したのだ。それで自然に別れてだ。

それ以来だ。彼女はずっと一人だったのだ。

「それは」

「けれどそれがね」

「溶けたのですね」

「いいことだよ。実際に君も気分はいいだろ」

「はい、とても」

「じゃあ幸せにね」

課長は笑顔で彼女に話した。しかしである。

不意に表情を少し変えてだ。こう言ったのである。

「しかし」

「しかし？」

「阪神が勝ったのはね」

少し難しい顔になってだ。課長は今言ったのだ。

「どうもね」

「阪神はお嫌いですか？」

「嫌いではないよ。ただ」

「ただ？」

「確かその時の相手は広島だったよね」

「はい、そうです」

まさにその通りだというのだ。相手は広島だった。

そのことは覚えていた。それで答えるとだった。課長は言っただ。

「広島ファンじゃけえのお、わしは」

「何でそこで広島弁なんですか？」

「生まれだからだよ。わしも女房に告白したのは広島優勝の時じゃ  
った」

「かなり昔ですか？」

侑布はついつい言ってしまった。

「それは」

「全く。もう二十年近くになるかな」

「今度は何時優勝するでしょうか」

「そんなの決まってるじゃないか」

課長はむっとした顔で言った。

「来年だよ」

「だといいですけれどね」

最後はこう言って笑顔で終わるのだった。侑布は程なくして結婚した。そしてそれから二人で温かく生きたのだった。その伴侶と。

コールドローズ 完

2010・10・3

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6035q/>

---

コールド = ローズ

2011年2月2日23時10分発行